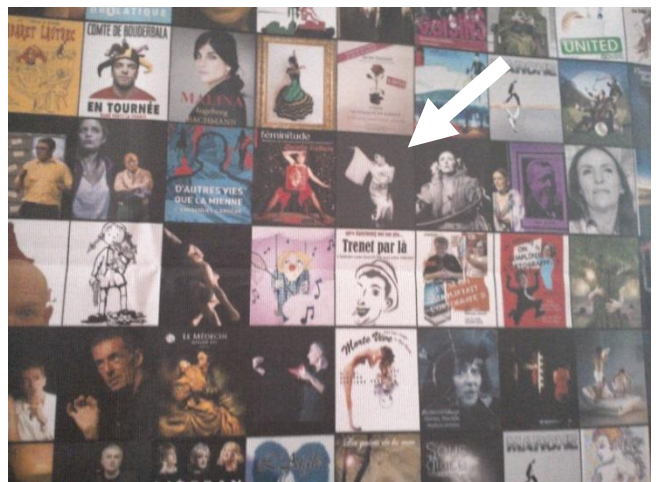


世界的 worldwide なんという心地よい響きだろう。

パリで活躍し、日本でも舞踊界の要職についている男性とパリのレストランで食事をしている時、「なぜ15年もアヴィニョンフェスティバルに通いつけているの？」と聞かれた。その時とっさに出た言葉が、「世界的」だ。「世界的とは何なのか、身を以て知りたい。遠くから自分とかけ離れたところで、鑑賞者として見るのではなく、自分が世界的な公演と競演をして、彼らと同じ空気を吸い、同じようにチラシを配り、ほんの1~2mの所で演じる姿を見て、その汗と体温を感じ、何が世界的であるのか知り、世界的である要素を探りたい。日本にいて日本人の感覚だけでは、日舞界という狭い世界にいただけでは見極めることが難しい世界的の意味を知りたい。」と答えた。「世界的とは？」イギリスのエディンバラ、フランスのアヴィニョン演劇祭に計19年も参加しながら、考え続けていることだ。

私の人生で最初に見た世界的は、ポリショイバレエ団のレペシンスカヤだ。母の膝の上で見たからまだ小学校に上がっていないころだったと思う。後年調べたら「春の泉」という作品だった。舞台上手(だったと記憶している)から走り出て、男性の腕の中に真横で飛び乗り、その後、男性に頭上で真横になったまま投げられると、回転をして男性の腕の中に戻る。今、アイススケート、ペア競技でよく見る技である。そのはるか昔に見た舞台を鮮明に覚えていて、彼女が空中で回っている姿を思い出し、そのエネルギーに突き動かされる人生を自分が歩んでいることの不思議さを覚える。幼少の頃の経験は、こんなにも人生を左右するのだろうか。そのダンスを見たことが、19年もフェスティバルに通いつけている原動力となっているから、“世界的”の与える影響は計り知れないものがある。

アヴィニョンフェスティバルは7月の三週間に開催され、直径1.2kmの城壁の中の1日1400程のオフとフェスティバル主催のイン公演で成り立っているが、実は世界的、と呼ぶにふさわしい公演はそう多くはない。13時から1時間の自分のフェスティバル・オフ参加公演を終え、片づけ、食事をすませて、公演鑑賞を始めるのが4時過ぎである。それから寝る深夜12時まで、食事やシャワーのために家に帰ってきてはすぐに出かけても3本の公演を見るのがせいぜいだ。翌日の公演をひかえ、自分の年齢を考え、疲れをためることは控えなければならない。言葉のわからない演劇は疲れるだけなのでパス。ダンス、音楽、クラウン、人形劇を中心に、自分の公演準備をしながら、午前中にその日の鑑賞スケジュールを決め、公演後は世界的を求めて町をさ迷い歩く。とは言っても、我が家のアパートから徒歩3分圏内に30以上の劇場があり、公演を見終わってから歯磨きをしてベッドに入るまで15分もかからないことも多く、同行の友人達からエネルギーギッシュと言われるが、そう疲れるような作業ではない。



オフ参加の全ての公演チラシが印刷されたシートの一部
約中央に「哀し」の写真

オフにはA4の大きさと厚さ2cmのプログラム誌の計338ページに掲載の127の劇場で演じられる約1350公演、インにはやや小さめの厚さ5mm程のプログラム誌に紹介されている60程の公演、すべてがオリジナル作品の合計約1400公演がこのフェスティバルに参加している。その中から自分が見ることができる公演を捜しだし、時間別にポストイットで印をつけていく。それぞれの公演は約1時間なので、1日の最初を4時半以後から始め、3本を毎日ピックアップする。今年のフェスティバルは金曜日の7月4日から日曜日の26日の23日間だが、私は毎年、第2、3週の15日間公演をし



オフ公演の開場を待って並んでいる観客

ていて、公演前日にしか町に入らないので、私には鑑賞日数が15日と最終公演翌日の丸一日しかなく、がんばっても50公演ほどしか見られない。イン、オフ公演の約1400の中から世界的な匂いがする公演を求めてプログラムをめくる。フェスティバル主催のイン公演が世界的かと思うと、それは大いなる勘違いである。イン公演は会場も広く、演出的に大がかりで大変に豪華で、大勢のスタッフがかかっているものが多い。皮肉にもそれが作品の凝縮に邪魔をしていると思う。出演者、スタッフの多さ、演出の匠さが絶対稽古量、練り上げの時間を削っていると思う。演者は本番通りの稽古があまりできないのではないか。演出者は本番通りの舞台を直前に見て、練り直しができないまま公演に突入するのではないか。演出家、振付家、演者ともに選ばれた実力者であるにもかかわらず、浅い作品が多いのは、見切り発車で時間が足りなかったのではないだろうか。その点、オフ公演参加者の稽古量は並ではない。それは、隙のない演出で、演者達の熟練度ですぐにわかる。そして一人のアーティストの強いこだわりで創られているものが多いと思う。

世界的とは何だろう。

濃密、ち密、斬新、大胆、豪華、洗練、時間密度、訓練、個性、熟慮、美意識、時代性。

これらが、作品に叩き込まれていて、しかもそれらが自然体で融合している時、この作品を世に出すためにどれほどの時間と労力が必要だったか想像し、感動する。私はどうしても、即興的な芸術に感動できない。即興は即興でしかない。毎日違うことをしているのね、と白けて見てしまう。1秒1秒が計算されていて、訓練と熟慮が叩き込まれた演技であることが最重要である。演技中、毎日同じ場所、同じ時間に足が出て、手が伸びることが重要なのである。その確かさは稽古でしか得ることができない。

考察に費やす時間の長さや訓練では出せないのが美意識、センスだ。これは持って生まれた美への感性で、それが観客に受け入れられるかがとても重要だ。私には共感できない舞台もかなり存在する。なぜこんな体の美しさを阻害するような衣裳を着るのだろう、なぜこんな汚い表現をするのだろう、見たくなかった、と悩んでしまうこともある。しかし、フランス人は持って生まれた美感が備わっている人も多く、小さな店のショウウィンドウでも何ともかわいらしい。演者の何気ないシャツでも感性を感じることもよくある。日本舞踊家は着物や扇子という非常に凝縮された美を持っている。その美を最大限に使わなければここでは勝負できない。

今年は、私の 19 年のフェスティバル人生ベスト 10 に入る作品に遭遇した。数多くの中から、この公演を捜し出すことができ、見ることは本当に幸せであった。いいものを見た時、あまり多くの事を語るができなくなる。自分の語る言葉の薄さに嫌気がさすからだ。美しい、斬新、濃密、大胆…うーん。映像とコスチューム、音楽、そしてダンスのコラボレーションであり、非常に費用が掛かっているが、その費用がすべて無駄なく使われ、絶対に必要なものであったと断言できる。完璧でどこにも欠点、不足点を見出すことができない。その作品に遭遇してから、その公演が頭から離れず、フェスティバルの半ばで終わるその公演を 3 回見た。そのオフ公演は

[Théorie des prodiges] Marcia Barcellos, & Karl Biscuit

もしかしたら、ここアヴィニョンには世界的になる直前の熱気があるのかもしれない。頂点に達する直前の、おごりや高ぶりのない、真摯に芸術と向き合った輝き、それこそがこの魅力なのかもしれない。皆、我こそは次の世界的、という熱い希望を持って参加している。世界的になるために、世界的とは何ぞや、と模索しに来る。でなければ、真摯にそして必死に演じるあの情熱を説明することができない。

この世界的であるための要素の中で、日本舞踊の創作作品を踊る自分が体現できるものは何だろうか。世界的とは余りにおこがましいので、本物になるための条件、このアヴィニョンで自分が戦える条件とでも言おうか。世界の人々が共感できるような斬新、大胆、豪華は、はるか日本からバッグ 2 つで来る私には、そして日本舞踊という民俗的な、限られた表現手段をする私には無理である。彼らは私に現代性や大胆さを求めているのではない。自分たちとの共通語を求めているのだ。そのことに気付くのに必要な 19 年だったのかもしれない。自分たちとは違う感覚、違う技術、違う世界感を求めて見に来てくれるのではないか。「哀し」(日本語名)という作品をミリメートルの踊り、と今年の新聞に評された。“ミリメートルの踊り”の字は私に衝撃を与えた。それこそは自分がここで戦うことができるものではないか。大胆とは対極のものだ。今まで海外で見た公演でミリメートルを感じたことは少ない。これを自分は求められているのか、と目の前が明るくなる思いだった。しかしミリメートルの踊りを演じるのは並大抵ではない。私は 100 回以上の公演をし、1000 回を下らない稽古をした「哀し」でも、今回評されたとはいえ、本当に 1 秒 1 秒を構築するミリメートルの踊りが踊れたか疑わしい。ただいえることはミリメートルの踊りならば、もしかしたら、稽古の量で体得することは可能かもしれない。日本舞踊のソロならば、本物を内蔵する公演をすることは可能かもしれない。2 人、3 人が絡み合い、ほどけ、また絡み合うような複雑なダンスに対抗できるデュエットやトリオを、我々は持たない。ミリメートルの踊りのソロならば稽古量を重ね、体と空間をち密に計算した本物が踊れるような気がする。



最終公演後にお客様と

世界中からの観客と芸人が入り乱れ、道で、広場で、カフェで、100 以上の小さな劇場で演じられ、

見られるこの祭りの中で、着々と世界的な公演が発せられている。発する芸人たちはおごることなく、へりくだることなく、公演前後に町に出て、チラシを配り、昨日見たよ、いい公演だったよ、と声を掛けあう。芸人たちはお互いに目配せする。集客はどう？がんばってる？ほら一昨日見たあの人たち、意外と若いのね、さっき見た美人たちがもうチラシ配りをしてる。ここアヴィニョンは、切磋琢磨の場であると同時に、最前線を知る場、あらゆる種類の価値観が交錯し火花を散らす場、世界的への通り道、やる気満々の輝きに出会える場、本物へ導いてくれる道場なのだ。そして、劇場で、道で出会う出演者、スタッフ達は同じ土壌で戦う戦友なのだ。このフェスティバルでの16日間は、私にとっては大切な大切な宝物経験なのである。

Egiku Hanayagi Danses Japonaises Festival d'Avignon 2015

Garage International Theatre in Avignon 10-24 Juillet

「鶴と蛙と鳥」

La Grue Blanche	「哀し」機織る鶴かなし	花柳 衛菊	振付：花柳 衛菊
La Grenouille	「蛙」	坂東 富起子	振付：吉村雄輝夫
Le Corbeau	「洒落鳥」	花柳 衛菊	振付：花柳 衛菊

パリ近郊の市立劇場の柿落し公演参加依頼等、海外で出会った人々の手引きによって、さらに世界が広がりつつあることに、継続の力、をつくづくと感じている。